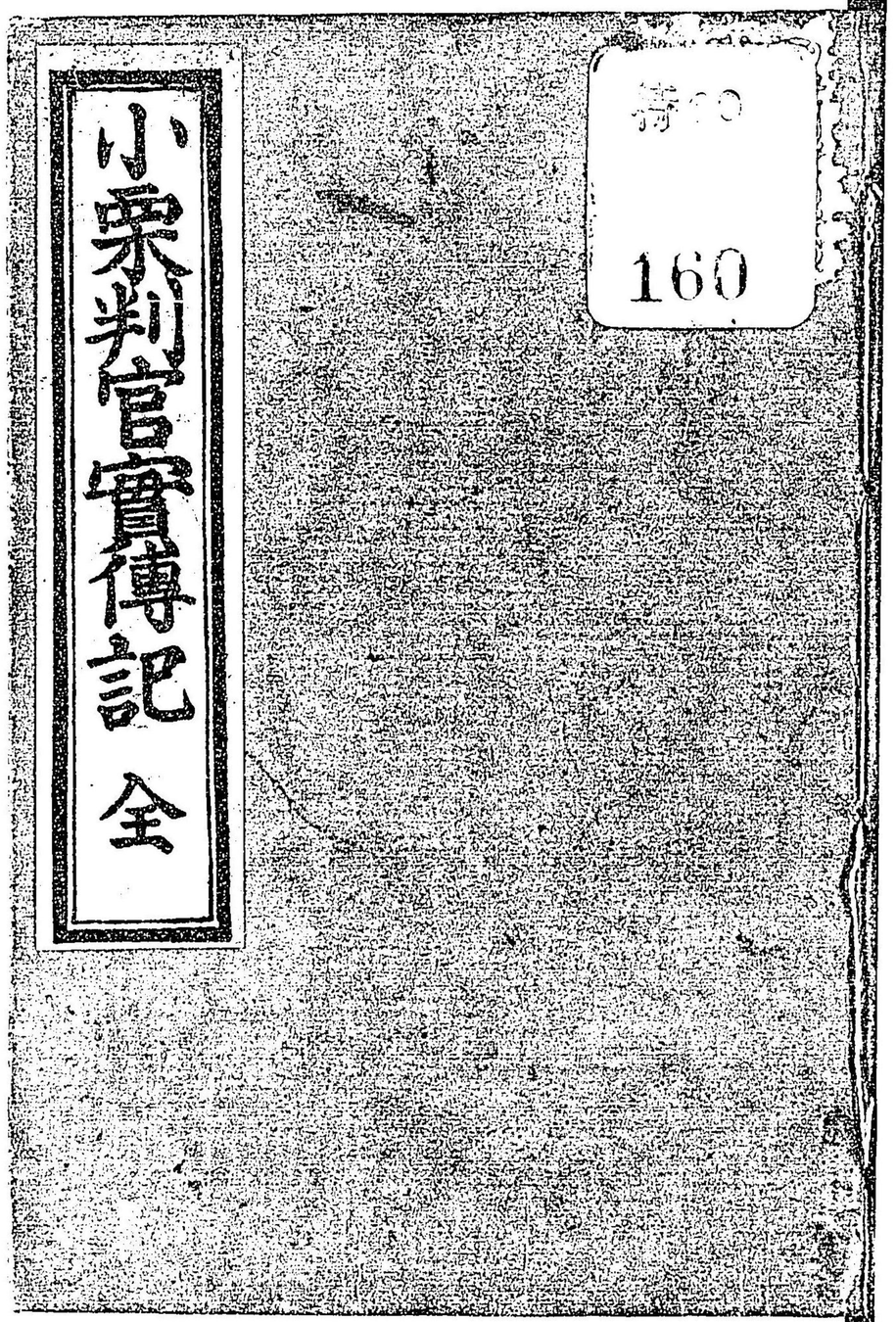


特60
160

092356-000-7

特60-160

小栗判官実伝記

野久知　橘莚／編

M19

DBP-1945

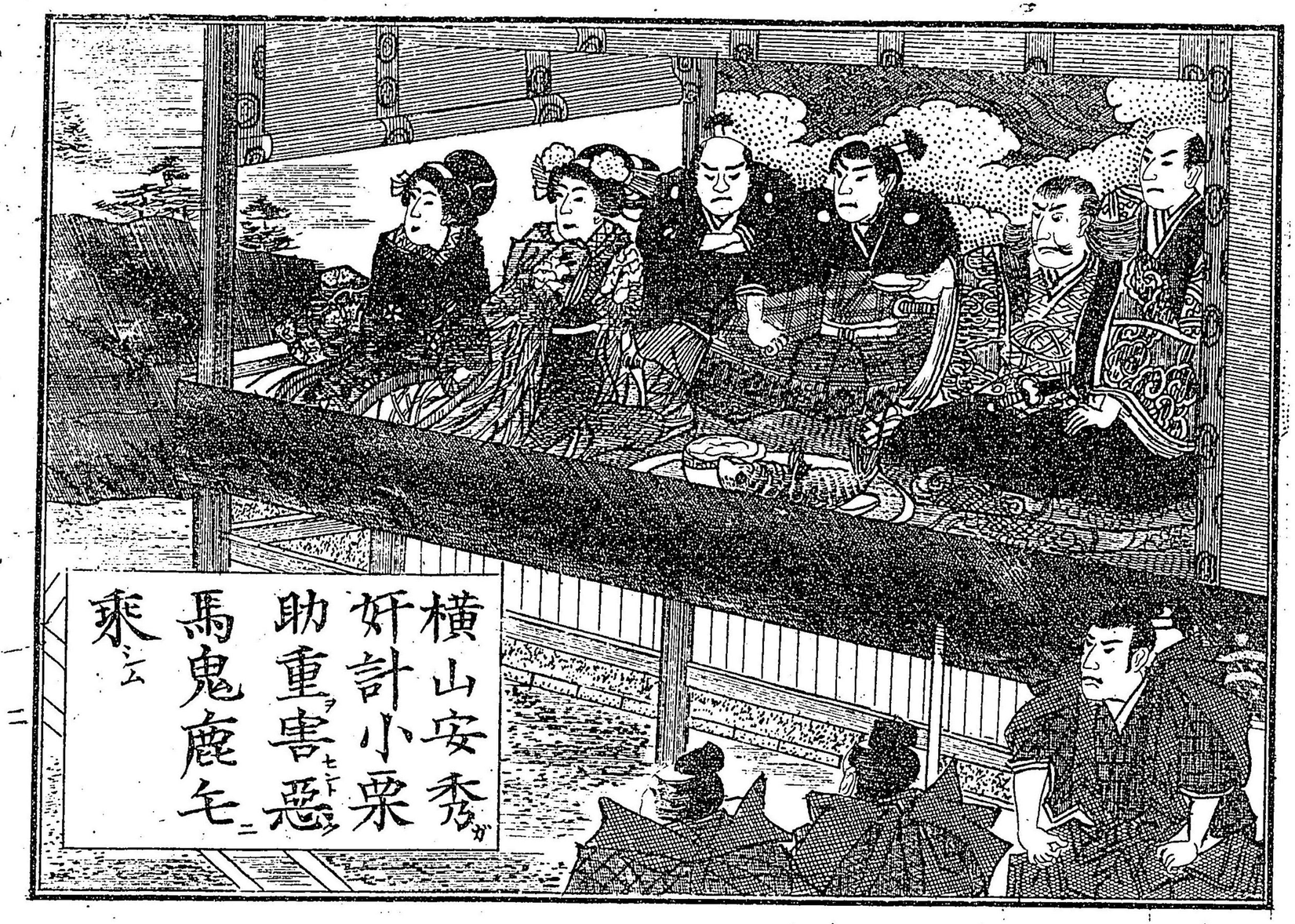
特60
160

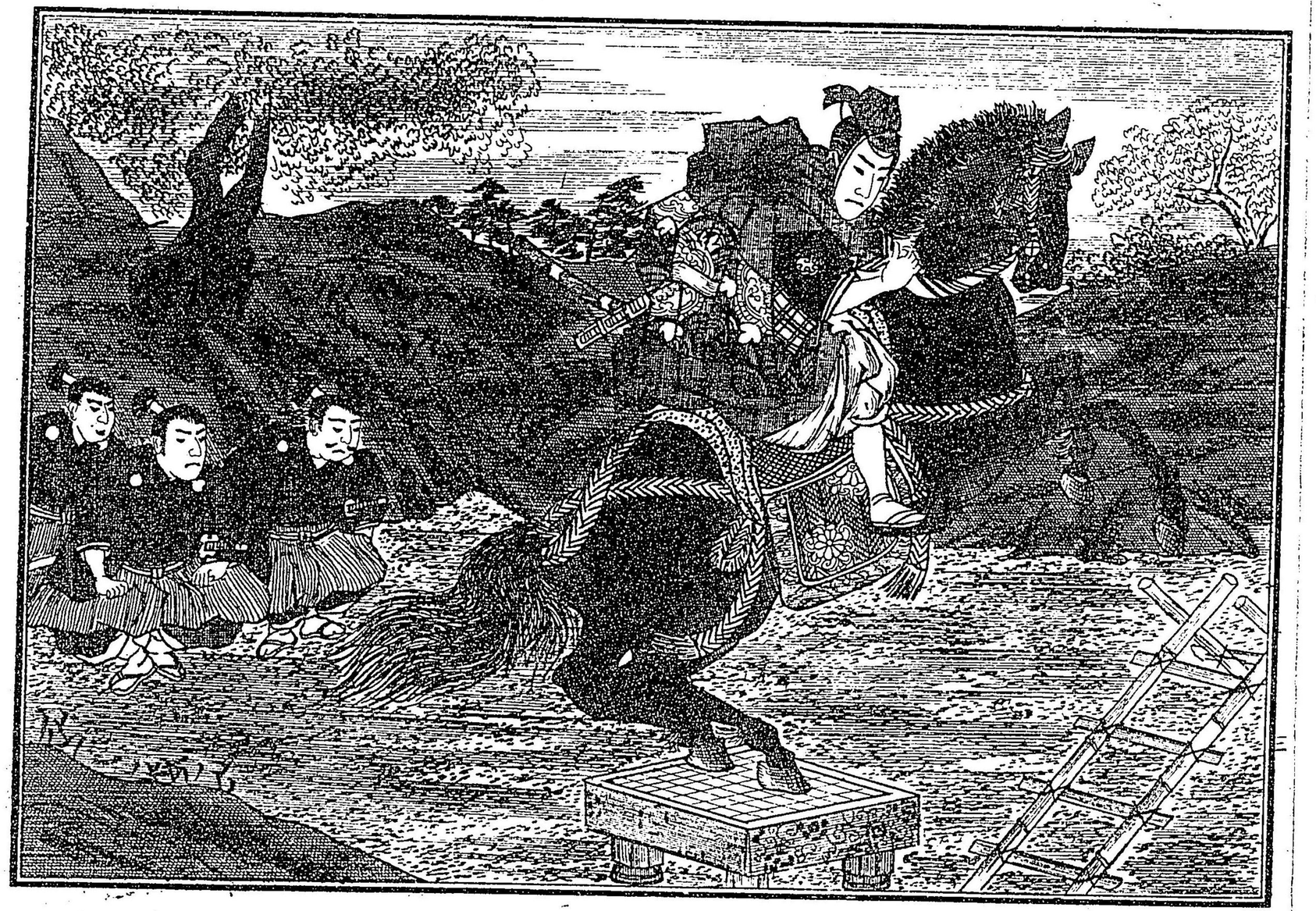
小説家實傳

編輯　野久知橘莚

近園梓

明治十七年十二月十四日　印刷
明治十七年十二月廿四日　出版


横山安秀ガ
奸計小栗
助重害惡
馬鬼鹿乞
乘シム



名武息女照天姫

小栗判官代助重

頃ハ
應永七年
足利
左兵衛佐
満貴公の
近臣ホて
常陸の国
小栗の
里を
領ス
獨子ホ小治郎助重とて顔
貌清らかにして父母ホ孝を
尽し弓馬槍剱の道ホ秀で
仁義ホ賢き若武者
柱り一門他門の
人々も賞潰せ
さるハなかりける

小栗
満重と
云ふ者ありし
其の

茲ふ名武篤光とて
同ド常陸の国を領し鎌倉管領ふ仕忠勤をはぐみし小栗と親しく交り
嫁さしゐんはとを約しる

或日息女照天を小栗助重ふ
聞るふ
悠永せ二年諸国群盗蜂起し民財を奪ふし注進ゐり小栗ハ常陸のくふ筑波山ふ住風間次郎同八郎と云ふ兄弟の強盗をいはしめ

説諭し善ふ
帰はじめ臣家と
迫る茲ふ又
名武篤光の
妻冒男ふ横山
安秀と云
肝悪。

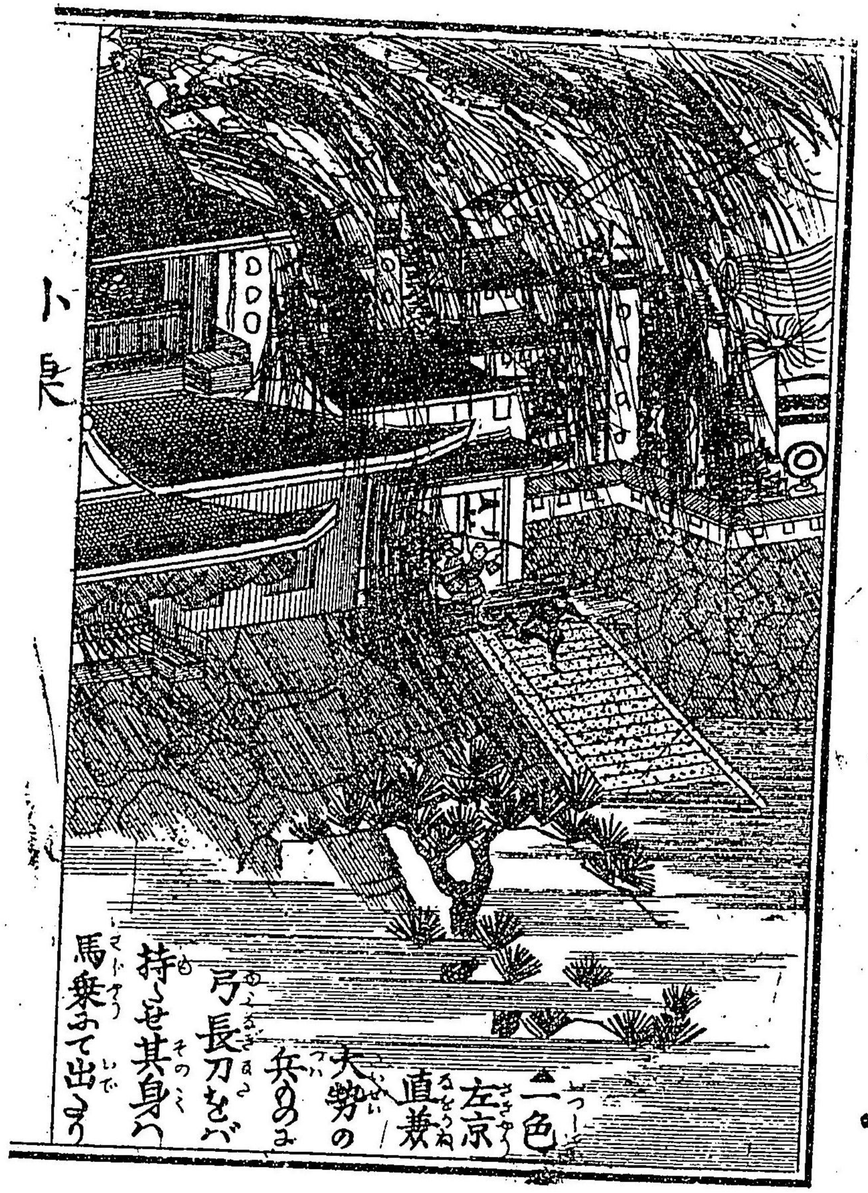
狼狽の

者あり。
義て

姉聟
篤光を
害せを
たくり
相模川
ふ魚猟
せんと
透引て
篤光を
害し

死骸を
脊負て
邸ふ帰り
入水と披露

偖も篤光
横死の後
旧法ふほう
女兒照天
成長の后
功あらんを
回家
没収せられる
旨言渡され
色詮秀


一色
左京
直兼
大勢の
兵のも
弓長刀をば
持せ其身は
馬乗ふて出る

名武の老儻美登
小四郎為国ハ
篤光の
命ふよ
常陸国
ふ

主の館
來う
此ふを
見て
大ふ
門裡ふ
鷲き
うと
色を

在りが主の横死を聞き
取物もとりあへず昼夜を分ち
走り鎌倉ふ
着き

直兼
下知て
れ綿ふと
言のさ
かこまと
と雑兵
討てくる
を斬り
たを退ぞ
行く隙ふ門
裡ふ入りこう

小四郎ハ
侍従照天の
行衛を尋ぬれど
何方へ落こうけん
ゆくへ
ふ思へねば是非なく
も後門より逃れ出ぬ
不在話下小栗満重ハ

妻の初瀬死ー
後ち
藤浪
と云へるを
側妻と思せ
より藤浪も
貪欲る毒婦あれバ
助重を
追ひ
出さんと
さまゞ
悪説を云て
解じ
るより
事発り
鎌倉殿
満重を疑ひ

詫〻給ふ折
柄一色詮秀ハ
持氏公のはあふいで

小栗満重をさまぐふ
後〻けまバ持氏
公信ドぬひ執ろ上杉憲定ふ
評議もなく小栗満重を討ち
取らんと
俄小栗
集ひ
給ふとやき満重ハ

常陸国田氣の城
引籠り自殺して
亦ふる時ふ助重ハ
浪の後ふて父の勘
をうけ居り合さぬ人
既ふ命もあやうき程の
病気ふれば人るもも
知らぬまふ姿ひしめく
落城を聞くといへども
もはまへもあり
聞くふ全快ま父の生害

共ふ悲
嘆ふくれ
殘を憤り地上
たゆく一色塗
討さんと主従十
蜜ふ後舎ふ立
仇を報ひ
怨を晴
さんと

家の滅亡を聞き
助重ゲ嘆ハ更
[illegible]
此所ふ滞留し
色ゲ行状を伺
ち山越の間道より

蘇の方ふ大きやかなる
壮院あり此日も
既ふ申の一刻
なれば小栗
頃也
宿借ん

▲言入れ(ふ)ふ小栗さらふ不審るがら
さはして行程ふ前ふ峠領より
(より)壮院ふ入
小栗主従を
別館ふ伴ひ
頃て一人の
老女出
来りを
ふるふ
延るん

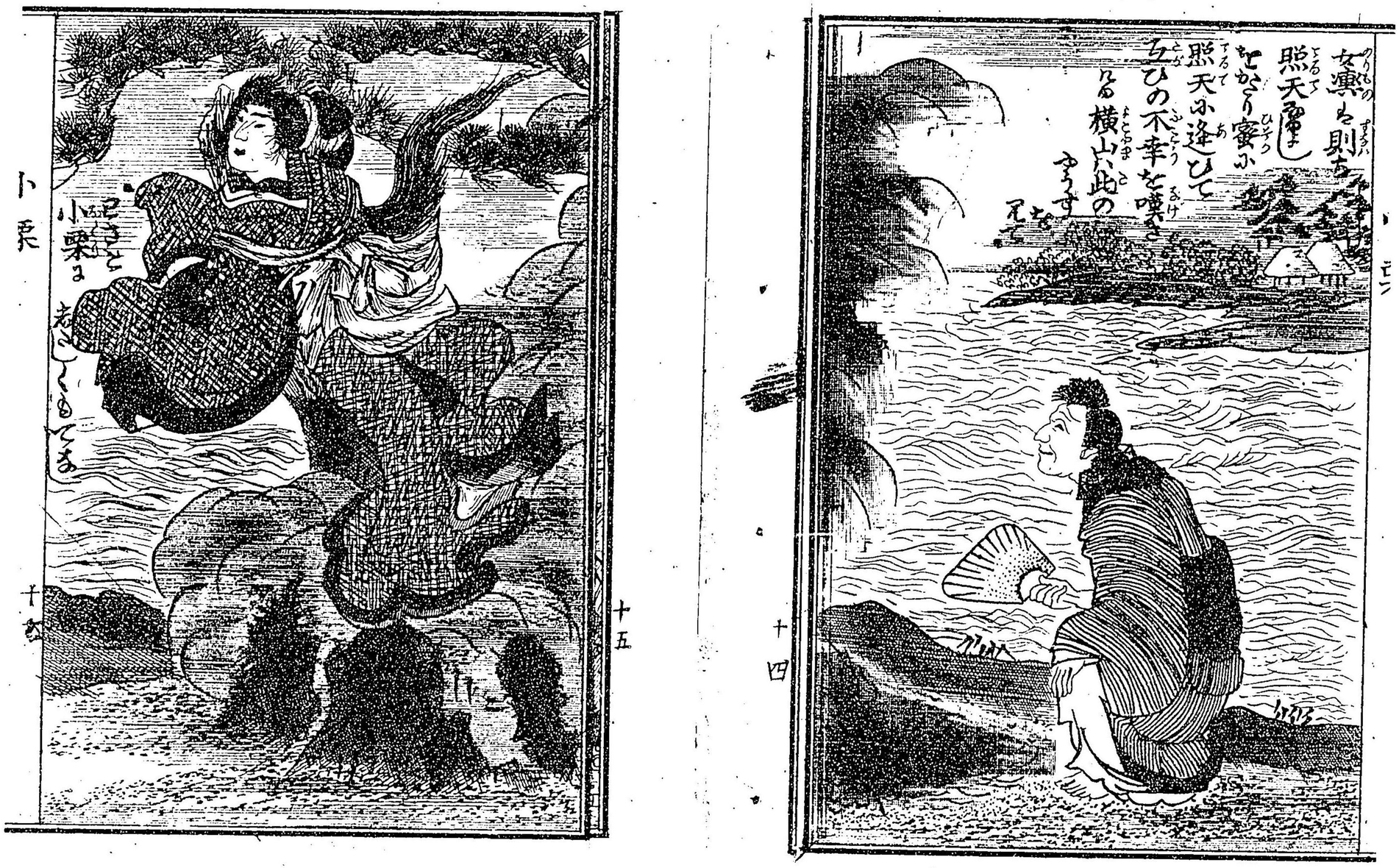
家の
所ふ
至り(ふ)
一乗の
女輿ふ
出逢ひ
侍女を
以て
今宵
我家ふ
宿りの人

老
儻
の池野
庄
平ら
時る
り
姿細
を
問ふ
是い
横山が邸ふ
今日逢

女禦も則ち
照天
をかくり宴か
照天か逢ひて
ひの不幸を嘆き
る横山か此の
ゆうす
そて
小栗
十四
十五

小助一横等本遂
栗重色山攻懐

十五


女禦ハ則ち
照天姫
ちかう宴ふ
照天ふ逢ひて
互ひの不幸を嘆き
名横山ハ此の
ゆうす
十四
小栗
十五

小栗を
害さんと
鬼麻毛と。
号る蔦
馬ふ乗
せるふ
る人あ
乗得ばが
矢のふ
討んと
竹ハ

小栗い
其場を立ち
去りゐへ
照天も
助重の
あとを慕ひ
邸を抜けいでが
惡者ふ勾引され×
×毒婦
藤浪ふ松葉
じふ呵責れ
逃れ入水せが人買船ふ助られ△

△美濃国青墓の宿ゟ万長と云妓楼ゟ賣渡され旋女となるべきを固辞して水仕女となり下り万長夫婦ゟ残酷ゟ仕られ山ゟ行て薪を切りやり〳〵脊屑て戻れが不足ありとて打られ流ゟ出て水を汲めむ

▲小栗助重ハ横山が俊計を逃れ軈て三州二村山ゟ身を隠め忍居り時の至るを待らしゝ頃しも春の弥生の空ら四方の櫻も

少きとて責られ今日や死ぬん翌日や命を捨ぬんと思へど若や助重ゟ逢ふことのなりもやせんと。

×折るれバ助重ハ日頃の替気を晴さんと美濃国金生山虚空蔵ゟ詣る

時知りて咲乱れる×

▲憂月日を涙ゟ送り居る▲

群集の中を巡る折喧嘩〜と忽ち
大勢う鼎の沸如く立さわぐを
何事ゆらんと立寄るれば四五人連の
大男が一人りの娘を押へけ交渉をせんと
もるさまみて附添ふ奴婢をもうたを〜
乱妨をすゑ助重ハ見るゑ
忍ハす四五人の悪
漢どもを追ひ退け
彼の主従の難
をも救ひ
たるゑ悦ふ
限りゑく

是ゑ万長の
娘花児▲

主▲従り是ゑり助重を我家ゑ
伴ひさまぐ

惜ても
花児を
助重を
懸恋し
さまゝふ
かき口説
美登の名

湯あがりせんと
浴室ふ
至りしふ
助重も
照天の
水仕女と
多の場る
さとを
初めて
知り
仍ハ
此事を
照天姫の身
代を贖ひ戻す

偖も花子ハ助重を恋慕ひが
照天を小栗の妻なりと
知りゝ忽ち嫉妬の心を
生ず助重照天の隠家
ゟ来り姫と争ひ〻が美登
小太郎ゟ隔られ花児いまゝ
妬みて狂ひまどり悪病ゟ終ゟ
悪死せり花児の怨霊附まとひ小栗を
悩ませ〻が助重が惣身爛れ湯傷せ〻如くゟて
醫療の志るしなく終ゟ人事を矢ひ餓鬼病となるゟ

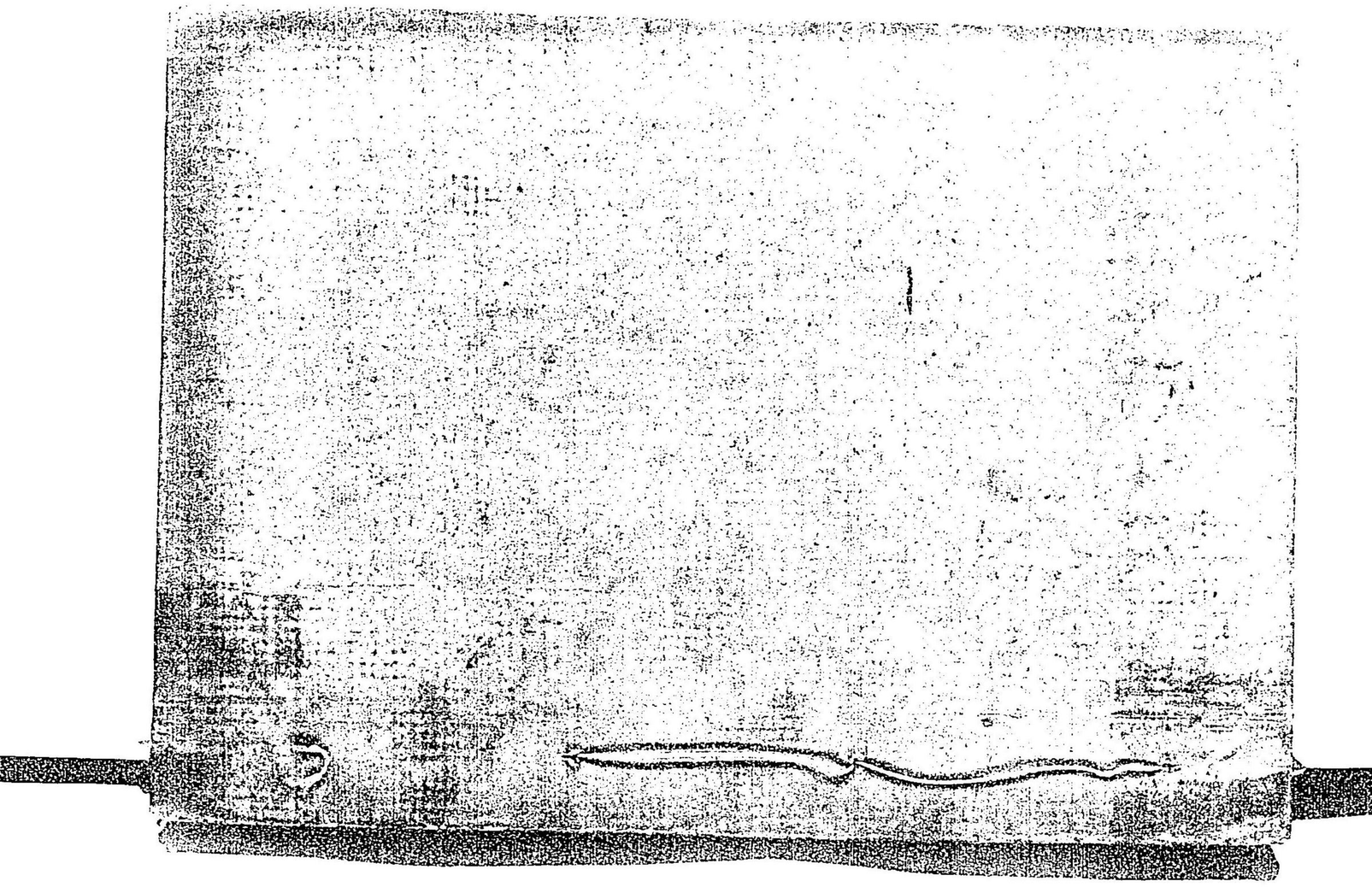
照天の嘆き大方ならず
助重を車に乗らせ
心の甲斐〳〵く
細手を引て
紀ノ路なる
熊野さして
行空の心の内ぞ
哀れなる
日を重て
紀州
熊野山に着けるハ餓鬼病の

小栗を瀧つぼに浸め
其身ハ權現の社
素足まゐりをし
一心にねんしけるハ
三七日の満願の日
に至り助重が病ひ
本膚なるに照天の
悦び大方ならず助
重も權現の利生
を尊ミ恭ひ信心
怠りなりける

かゝる呼へ助重が勇臣
池庄司助長ぞ
後藤兵助々高同
大八郎高次田辺
平六郎長秀同ゞく
弟平八郎長為
美登小太郎為久
片岡加太郎春教
同ゞく加次郎春高
風間次郎正負
同八郎正国

青葉の
刀長ホ
一泊ヨし
日をついで
鎌倉ホ着けまゝ
の十侍のゝく
走集り主人の
蘓生を祝し
夫より一色
詮秀横山
安秀ホを
誅せんことを
軍議ヨして
傷合さ
て
向ふす
天濃国

小栗助重、一色絵秀を討取る
横山が誅を押寄せ攻る

横山が誅を押寄せ攻る
四人の降参
討死
多年の怨
鎌倉に言上
小栗名武両家

御届 明治十九年十月廿五日
日本橋区小傳馬町三丁目十番地
編輯兼出版人 長谷川園吉